

マーケット街の光と闇

——同時代の人々の目に映る池袋——

I

平成二七年は太平洋戦争終結から七〇年という節目の年であったため、戦後社会を再検証する機会やイベントがいくつかが開催された。その中には終戦直後から日本各地に開かれたマーケット、特に池袋に焦点を当てたものもあり、豊島区や立教学院、東京芸術劇場などが主催の「戦後池袋—ヤミ市から自由文化都市へ—」もその一つで、数多くの来場者があった。それだけ戦後の池袋という地が注目されていることだろうが、それというのも池袋がそれまで麦畑や大根畑が広がる、ただの郊外から終戦直後に広がったマーケット街が契機となつて、他の地域では見られないほど急激な発展を遂げ、現在のように新宿や渋谷と並ぶ副都心になった地域であったことが挙げられる。近年、社会学的観点からのアプローチによる戦後のマーケット街に関する研究報告^①や、日本各地の闇市を取り扱った文学作品のアンソロジー^②なども刊行されている。そういった状況の中で本稿では池袋という場所に絞って、同

影山 亮

時代の文学作品にどのように描かれ、雑誌に取り上げられ、新聞で報道されていたのかを調査することで、同時代の人々の目に映った池袋という地を検証していく。また池袋には古くから「豊島文人会」^③に所属していた江戸川乱歩や山手樹一郎、大下宇陀児などの文人や、「池袋モンパルナス」に代表される小熊秀雄や長沢節などの芸術家が数多く居を構えていた。このことから池袋は一種の文化的な空間としても認知されていたが、戦後のマーケット街が起因となつて発展していく池袋を、そういった実際に池袋で生活する人々はどういった視点で捉えていたのかも併せて考えていきたい。

II

まずは戦後池袋の発展が、同時代紙誌においてどのように伝えられていたかを見ていく。明治三六年によく駅が開設された池袋であったが、歌人の若山牧水が「麦ばたの 垂り穂のうへに かげ見えて 電車過ぎゆき池袋村」^④と詠んでいるように麦畑が広

がるのどかな地域で、なかなか発展が進まず隣の太塚駅にも後れをとっていた。「桃太郎侍」(『岡山合同新聞』昭和一四年)や「夢介千両みやげ」(『読物と講談』昭和二三年、公友社)など多くの時代小説で大変な人気を博し大正三年に現在の要町へ転居して来た山手樹一郎も、この当時のことを「池袋の奥の麦畑の真ん中へ、小さい家をたてることになったのである」と振り返っており、やはり池袋は「麦畑」が広がる街であった。昭和五年三月二四日からの帝都復興祭を経て、昭和七年一〇月一日に大東京が誕生し、同時に豊島区が成立する。その二年後の昭和九年には江戸川乱歩が池袋に引越して来るが、その乱歩も

そのころの池袋は実にさびしかった。今とは全くちがう非常に狭い常盤通りが唯一の中心地帯で、商家が軒を並べ、新開地の繁華街という感じだったが、そのほかの一帯は、点々として住宅が建っているばかり、町らしい町もなく、立教大学の周辺などは、ずっと原っぱで、まだ畑があったように覚えている。

と振り返っている。そもそも乱歩は芝区車町という都会の喧騒から逃れるように池袋に転居したのだから、依然として池袋がのどかで畑の多い地であったのは言うまでもない。そんな池袋にも次第に賑やかさが押し迫って来る。

二つの私鉄をもつ池袋は、西側『池袋銀座』の一面に、百貨店、十銭ストア、大果物屋、カフェー、喫茶店、ローラース

ケート場と盛り場を集めてアパート夫婦と学生と、むさし野のおもかけを遠く追ひやつて朝夕の混雑こそすさまじい¹⁷⁾

昭和一〇年当時のアベックが集まる地域を調査した本に池袋も掲載されているが、その章題が「池袋駅」であることから、あくまで池袋駅付近だけが盛り場であり、駅から少し離れると相変わらず牧歌的な地域であることに変わりりはなかった。やがて太平洋戦争をむかえ、乱歩が

わたしの家から池袋駅までは、すっかり焼け野原になってしまつて、家の障子をあげると、これも半分こわれた池袋駅が、直接眺められたものである¹⁸⁾

と書き、立教大学で長年チャプレンを務めた竹田鐵三が

池袋駅に降り立つて見渡すと町一帯の焼野原。何もなければ立教の校舎がスグそこに見えた。澄み渡った秋空に秩父の連山。富士山までクッキリと見える。変り果てた池袋の姿¹⁹⁾

と書いているように、いわゆる東京大空襲の中でも特に大規模だった昭和二〇年四、五月の空襲によって池袋は壊滅的な被害を受け、焼野原と化した。敗戦を迎えた日本は当然のごとくさまざまな物品が配給では足りず、自然発生的に闇市や、それに屋根をつけたマーケット街が日本各地に見られるようになる。その中でも特に池袋駅の東口、西口に発生したマーケット街は他の地域の

それらに比べ、非常に大規模であり、発生した時期も早かった。池袋の闇市、マーケットに関しては「池袋戦災復興マーケットの実態調査」(社会福祉研究室『HUMAN RELATIONS』昭和二年三月、立教大学文学部研究室)や、星野朗・松平誠「池袋」や「み市」の実態——第二次世界大戦後の戦災復興マーケット」(応用社会学研究)昭和五年三月、立教大学社会学部研究室)がいち早く詳細な調査を行っている。これらの先行研究は現在の闇市や戦後マーケット研究においても第一級資料であり、社会的なアプローチはこれらの資料を参照していただきたい。また松平誠「ヤミ市東京池袋」(昭和六〇年六月、ドメス出版)によれば「今日の東池袋一丁目地内一万九三八〇平方メートルが、当時の焼け跡に建てられた池袋東口ヤミ市の土地」であったほど巨大であり、西口周辺も含めて昭和二年二月には三万五〇店の露天商が池袋駅周辺に集まっていた。さらに昭和二三年の東不二雄の調査では都内に発生したマーケットの規模を表しており「最も大きなマーケットは池袋駅西口方にあるもので、坪数二二五〇坪に及び三四〇の店舗を有し、一大商店街を成している」とし、池袋駅西口に広がっていた「池袋戦災復興マーケット」が一位にランクインしている。ちなみにこの表の二位には二三六店舗で池袋東口復興マーケットがランクインしている。池袋駅周辺にはこの二ヶ所のマーケット以外にも大小さまざまなマーケットが存在したが、この二ヶ所のマーケットを合わせただけでも五七六店舗を誇っている。戦後のマーケットで同じく有名な新宿マーケットも二ヶ所ランクインしているが、合わせて三三五店舗にとどまっていることから、池袋のマーケット街の規模の大きさが分かるだろう。

それだけ他の地域と比べて大規模な池袋のマーケット街は、その周辺で生活する街娼や浮浪児や氾濫するヒロポンやカストリなどの状況を含めて、同時代のカストリ雑誌で数多く取り上げられ、同時代の人々に伝えられている。

例えば昭和二三年六月の『文化グラフ』(東京展望社)では当時の池袋を写真とともに「ぶくろの生熊」と題して、

ぶくろの中心は、なんと云つても駅前マーケットだ。ゴチャゴチャした雑踏の中に安価な近代趣味が溢れている。統制も何もあつたものではない。カストリあり、飯あり、そばあり

と伝え、また昭和二三年八月の『漫画 見る時局雑誌』(漫画社)には六浦光雄が「池袋でか目ろん」と題して

まいんちまいんち人間の傷のつく事件があつても東洋のモナコののれんに傷はつかないといふ、酒と女と賭博と人殺の盛り場池袋。(略) 駅の東西にその昔の玉の井に似たブラックマーケットの迷宮路(ラビリンス)。あとからあとから疥せんものやうに広つて行く迷宮路(ラビリンス)

と、当時の池袋を絵とともに伝えられている。「ゴチャゴチャ」「東洋のモナコ」「迷宮路(ラビリンス)」は所狭しと広がっていた池袋のマーケット街を的確に喩えている。他にも梅崎春生が「クモの巣のようなマーケット街」と喩えるなど雨後の筍のように

次々と広がり、その縦横に入り乱れる路地に隙間なく軒を連ねていた状況は、池袋のマーケット街の特徴としてさまざまな表現で伝えられていた。さらに言えば他の地域よりも特筆するに値する程の広さを誇ったがゆえに、池袋のマーケット街を同時代のカストリ雑誌が取り上げることによって、それを読む同時代の人々に「池袋といえはマーケット街」というイメージが浸透していっただろう。

池袋のマーケット街についてその広さとともに、欠かすことが出来ないのが悪所としての側面である。

ヤミ取引と戦後が生んだ新商売往来が都の西北池袋に現出した、従つて犯罪の温床地とも言はれている、池袋駅を中心としたマーケット街は銀座、新宿、浅草、上野とは異つて入りこむ人種も違えば、朝から晩まで、いんしんを極めてゐる、(略)金さへあれば池袋は極楽浄土だ、それだけに反面犯罪を構成する

『探偵新聞』(東京探偵新聞社)^⑬は昭和二二年に創刊された新聞で、同時代の事件や事故を丁寧な取材で報道していた。昭和二三年九月五日付に掲載されている「新東京風土記 池袋の巻」の記事で注目すべきは、池袋を「犯罪の温床地」と報道している点である。戦後のマーケット街と、そこに集まる人々が織り成す犯罪とは切っても切り離せない。それゆえマーケット街が広がる地域は悪所として認知されるのは当然だが、こと池袋に長らくそのイメージが強いのは、池袋のマーケット街が他とは比べものにな

らないほど、長く存在し続けたことが影響している。

戦後日本の各地に発生したマーケット街は、昭和二四年から二五年頃にはほとんどが撤去された。池袋駅東口に広がっていたマーケット街も、

人の好きそうな五十がらみの親爺が不安そうに尋ねた。なる程そう思うのも無理はない。折柄の冷雨の中を家財道具や畳等をリヤカーや荷車に積んだ人達が固めて居り、新聞社や映画社のカメラが放列をしいているのだから。「いや、あのマーケットを建設院が壊し初めたんですよ」「とうくやりましたか。それが本当ですよ。随分横暴な奴等でしたからね」(略)——三月十八日朝決行された東京都池袋駅東口前のマーケット除却処分の一挿話である^⑭

と報道されているように昭和二三年頃から区画整理が始まった。その後昭和二六年七月一四日付の『読売新聞』で、

「池袋名物」として親しまれてきた露店もこのほどようやく「土地払下げ」問題の話がまとまりいよいよ十一月一杯で姿を消し恒久的な商店街として更生することになった

と報道されているが、結局昭和二七年までかかって撤去が完了したのだった。しかし一方で西口のマーケット街はその後池袋の象徴として存在し続けており、昭和二六年一〇月一四日付の『読売新聞』には、

池袋駅西口マーケット真裏にある東京学芸大付属小、中学校（校長佐藤卯吉氏）は環境の悪い点では都内屈指である、終戦後まもなくボスの暗躍でバタバタと建ったバラックは現在軒近くもあり、その大部分が怪しげな飲食店ばかり『店の七割が売春行為を働く女給だ』と池袋署保安係で語っている。

と報道されていることから池袋西口にマーケット街が引き続き存在していることが分かる。その後もさまざまな同時代の新聞紙上で池袋西口マーケット街は「城北の魔くつ」¹⁵、「無法地帯」¹⁶、「黒い地帯」¹⁷という言葉で報道されていく。

西口の方は着手が遅れたため、今になっても区画整理が進まず、迷路のような小路には飲み屋などがギッシリ並んでいる。ところがそれが池袋のよいところなのだろう。東口のとりすましたふんい気と西口の気安いふんい気が一つの町に混然一体となっているからだ。

昭和三〇年一月二十九日付の『毎日新聞』に至っては、依然として残っているマーケット街を「池袋のよいところ」と報道している。その後も西口マーケットは影を潜めず、昭和三十一年の「もはや戦後ではない」のスローガンの下で日本全体が高度成長期を迎えている中でも、池袋は戦後の象徴であるマーケット街のある地として報道され続けた。それは同時に池袋が犯罪の多い悪所と

して、同時代の人々の目に映り、認知されていった。そして東口に遅れること約一〇年、昭和三七年末をもって西口のマーケット街は完全に姿を消すことになった。¹⁸

以上のように戦後あちこちで発生したマーケット街だが、なかでも池袋のマーケット街はその抜きん出た広大さと撤去に時間が掛かったがゆえに、同時代のカストリ雑誌に取り上げられ、新聞で報道されていった。それは同時代の人々に池袋といえはマーケット街というイメージを抱かせると共に、特に西口のマーケット街は池袋の「名物」で「よいところ」とまで嘲笑され、悪所としての一面が強調されて映ったであろう。

III

前章では戦後池袋の象徴であるマーケット街が同時代のカストリ雑誌や新聞で取り上げられ、報道されることによって、同時代の人々にどのように池袋が映ってきたかを見てきた。本章では池袋を扱った同時代の文学作品に焦点をあて、どのように池袋が書かれたかを考察していく。戦後のマーケット街を中心とした池袋を描いた同時代の作品といえば丹羽文雄『蛇と鳩』（昭和二八年、朝日新聞社）などが有名だが、瀧川駿という作家も戦後の池袋を描いた作家のひとりである。あまり知られていないが瀧川は、昭和八年に読売新聞社を退社後、雑誌社の編集者を経て作家となり昭和一九年に『小堀遠州』（佃書房）が直木賞候補になった作家である。また豊島区にゆかりのある文人たちで結成された「豊島文人会」の前身にあたる「豊島文人懇談会」、「豊島区在住作家忘

年会」からのメンバーでもあった。そんな瀧川の作品に「脂粉の町」という作品があり、この作品は昭和二四年四月に蒼土社から刊行された雑誌『小説娯楽版』に掲載された短編小説だ。

マチ達がこの町へ流れ込んで来たのは、終戦後まもない事である。秋風の立ちはじめていた頃であつたと思う。「小母さん、どつかあたい達の、働くところはないか知ら……」と、池袋の細やかな料理店の、宵月の勝手口に、突然のように現れたのであつた

別に東京の池袋に郷里がある訳でも、姻戚がある訳でもない。ただ東京へ出て見たいと云う漠とした希望があつたので、東京と云う文字と池袋と云う文字を書き込んで貰つて置いたのにはかならない。(略)郷里は金澤から十七八里も離れた石川県の能美郡の片田舎だが町の工場で(略)それに工場の中の、同僚たちの話に東京の池袋と云う言葉がよく出て、とても面白いところのように聴いていたので、そこへ出て働いて見たくなつたのである。別に深い計画があつた訳でも、人に唆かされた訳でもない。東京の池袋へ行きさえすれば、なにか面白い華々しいものに行き遭えそうな興味が誘惑で、飛び出して来たものである

主人公のマチという女性は「華々しいものに行き遭えそうな興味」で、石川県から蓬と鮎子を連れて池袋に流れてきたのだったが、三人は池袋で体を売る女性たちを目の当たりにし驚愕する。

しかし次第に自分たちも客を取るようになり、池袋の住人となつていくというあらすじであるが、この作品の特徴は「熊野神社を中心にした三業地帯から、立教大学へかけての、焼残りの池袋の一带は脂粉の町である」、「黄昏の池袋の町は、なにか色つぽくて華々しい。鮎子は隣の女に附いて、五ツ又のロータリーから駅前へ、ゆつくり緩い足どりで歩いてきた」、「宵闇が池袋駅を包むと、駅を中心にしたマーケット街が輝き始め、妖しいいろいろな花が咲く。上海の町の白蘭娘(パレホのコカレニヤン)に似て悩ましくも物凄い風景である」というように、池袋のマーケット街を中心にした盛り場が詳細に描かれていることである。この詳細さはまさしく作者である瀧川が、豊島区にゆかりのある作家であることに起因しているのであろう。瀧川には他にも『池袋風俗』(昭和二二年、真珠書房)という作品もあり、こちらの作中でもマーケット街を中心とした池袋が詳細に描かれている。

さて戦後の池袋を描いた同時代の文学作品のなかには瀧川のように単に同時代の池袋を描いた作品だけでなく、他の地と比較するように当時の池袋を描いている作品もある。

詩人として著名なサトウ・ハチローは昭和二二年から二三年にかけて「家庭読物」(日本消防文化協会)という雑誌に「新東京八景」という詩を連載していた。この八景には池袋も含まれており、昭和二三年三月号に掲載されている。

チャチで安手で、はすッぱで だらしがなくて おひきずり
池袋はそんな町です 残念ながら、そんな町です 玉ごろか
しの五色の玉 雨にさらされたハリガミ細工 古チユーブの

匂いと 魚のヒレの匂いとのカクテル その風の中を人が
通る ただ、むやみと人が通る 町の一隅に、たたくめは
もの悲しさにとらわれる池袋です

短い詩であっても特に「チャチで安手で、はすッぱで だらし
がなくて おひきずり 池袋はそんな町です 残念ながら、そん
な町です」という箇所は、当時の池袋を端的に表しているだろう。
ちなみに『家庭読物』は同時代に氾濫していたカストリ雑誌であ
るため、その全貌が把握できていない。この「新東京八景」は、
刊行されているサトウ・ハチローの詩集等には採録されておらず、
よって残りの七景のうち一景しか把握できていない。その一景は
昭和二三年二月号に掲載された「丸の内附近」と題した詩であ
る。

GHQの建物に 紅い夕日の照りかえし 帝銀のパレー公演
のポスターに しびよるたそがれに しずかなるエキゾチ
ック 口笛が流れる―アルゼンチン タンゴ ふと角を曲
ると くすんだ赤煉瓦から のぞいている夕月 その黄色ッ
ぽい青よ スバル座の中に 吸いこまれて行つた女の足 風
にのこるサイクラメンの香り 丸の内です あゝ、丸の内の
センチメントを のせて 西へ行く汽車が出て行きました

「古チユーブ匂いと 魚のヒレの匂いとのカクテル」の池袋
に対して、丸の内附近にただようのは「サイクラメンの香り」で
あるなど、池袋との差異は歴然だ。単純に比較は出来ないかもし

れないが、「新東京八景」の「池袋」は「丸の内附近」の次号に
掲載されていることから、同時代の人々には当時の丸の内附近
と読み比べて、「もの悲しさにとらわれ」た池袋が「残念ながら」
垣間見えただろう。

戦後池袋を扱った同時代の小説といえは、林美美子の『浮雲』
も欠かすことはできない。『浮雲』は昭和二四年一月から二六
年四月まで『風雪』（六興出版社）、『文学界』（文藝春秋社）に連
載され、連載終了月に単行本化された長編小説である。戦中に仏
印へタイピストとして渡ったゆき子は、その地で出会った富岡と
恋に落ちる。終戦後帰国したゆき子は、先に引き揚げていた富岡
と再会し、二人が足を向けるのが池袋である。

このごろ、池袋に小さい旅館が出来ていると誰かに聞いてい
たのを思い出して、富岡は池袋へ行った。煎餅のような生木
の薄いバラック旅館が、いくつも建ちかけていた。気まま放
題に家が建ち並んでいる。市場（マーケット）あり小料理屋
あり、ひしめきあっている休息の混雑状態が、かえって女を
連れてかくれるには、かつこうの市街であった。

ゆき子と富岡は、マーケット街を中心にカストリや旅館が広が
る「急速に混雑」した池袋で部屋をとった

二人ともカストリの酔いがまわるにつれ、このまま泥々に溺
れこんでも仕方がない気持ちになって来るのだ。（略）二人
は平気で離れなかった。風のかげんか、省線の電車の音が轟々

と耳につく。布団の上にぬぎっぱなしの二人の洋服が、人間よりもかえって生々とみだらにみえた

二人は池袋の旅館の部屋を密会の場としてその後も使用し、かつての仏印での日々とはかけ離れた生活に「泥々に溺れこんで」いく。やがてゆき子はこの旅館の主人の斡旋で荒物屋の古い物置を借りて、一人で新たな生活を始める。

食慾だけでは満たされない淋しい感情が、雨のように心に降りかかって来て、ゆき子は、蒲団の縫目を数えてみたり、只、荒く木を削っただけの壁をみつめたりした。ローソクの灯が板壁の隙間風にゆらゆらとゆれて、時々消えかける。心細くなって、ゆき子はこうした独り住居に耐えて行けるかどうか考えるのだった。(略) これだけでも生きてはいられるものだと、小さい幸福らしいものは感じるのだったが、心もとなしい幸福らしさで、明日の事は少しも判らないのである

自立するというある種の野心の下、新しい生活を始めるゆき子だったが、その生活は想像したものとは違った淋しく、心もとないものとして描かれている。一方で『浮雲』には新宿の街も描かれている。

ゆき子は新宿へ出てみた。何年ぶりかで見ると新宿は、相変わらずの雑沓だった。知った顔は一人もないのが、ゆき子には他郷を歩いているような気がした。新型の自動車が走り、し

わしわした寒い歩道を、群衆を着ぶくれば歩いていく。(略) 旧弊で煩瑣なものは、みんなぶちこわされて、一種の革命のあとのような、爽涼な気がゆき子の孤独を慰めてくれた。何処よりも居心地のよさを感じて、酸っぱい蜜柑の袋をそこいらへ吐き散らした。こうした形の革命は、容赦なく人の心を改革するものなのか、流れのように歩いている群衆の顔が、ゆき子にはみんな肉親のようになつかしかった

作中の新宿は「新型の車」が走り、ゆき子に「爽涼」で「居心地のよさ」を感じさせ、群衆には「肉親のよう」な懐かしさを抱かせる。またこの後ゆき子は外国人のジョオと出会い、新たな生活へと転身していくのだが、出会う場所は新宿であり、その出会いはゆき子に「一種の生氣」をもたらし、サイゴンにいた頃の気持ちに戻していく。

林芙美子は、ゆき子を東京の町へと連れ出す。新宿、池袋、高田馬場を歩かせる。いずれも、林芙美子にとってなじみ深い町である。(略) 「暗い」物語のなかで、この新宿の場面は珍しく明るい。「革命」や「改革」といった大きな言葉が無理なく、弾むように使われている。「新宿」という、林芙美子がかつとも愛した町だからこそその活力だろう

川本三郎は『浮雲』をおおう『暗さ』(『大航海』平成一二年八月、新書館)において『浮雲』で登場する東京の町を「林芙美子にとってなじみ深い町」とし、その中でも新宿の場面が明るい

ことを指摘している。そしてその理由として「林芙美子がかもつとも愛した町だから」と説明するに留まっているが、同じマーケット街の広がる新宿と池袋でも違いがあった。それは作品内の舞台である昭和二十一年頃^②だけでなく、『浮雲』が連載、刊行された昭和二十〇年代前半から三〇年代にかけてもそうであったのだ。それについては先に挙げた当時の池袋を扱った詩や、前章で挙げた当時の池袋を報道したカストリ雑誌や新聞が物語っている。すでに述べてきたので簡単にまとめるが、戦後池袋は東西両口のマーケット街を中心に盛り場となっていくが、他の盛り場に比べて特に「汚い」、「もの悲しい」、悪所という点がクローズアップされ、同時代の人々の印象となっていく。さらに「浮雲」が連載、刊行された昭和二十四年から二六年頃は区画整理による東口マーケット街の取り壊しや再開発に関する事件、西口の依然として残るマーケット街の問題が世間を賑やかしていた。確かに新宿も終戦直後は「光は新宿」を掲げてマーケット街が発生していたが「浮雲」が連載、刊行された昭和二十四年から二六年頃には、岩動景爾『東京風物名物誌』（昭和二六年二月、東京シリーズ刊行会）に

第二次大戦で大半災禍を蒙つたが、その復興ぶりも目覚しく、始めは一部新興ボスの君臨する暴力と闇の街として悪評を蒙つたが、マーケット、カストリ横丁も次第に潰えて昨今は漸く正常な姿にもどり、山の手小市民の盛り場として再び明るい親しみ易い街に立ち帰りつつある

とあるようにマーケット街は除去され「明るい」、「明朗」、「親し

み易い」街へと変貌していった。^③「浮雲」の作中でゆき子にとって池袋は、仏印の頃とは変わってしまった富岡と「泥々に溺れ」こんでいく場所として描かれている。やがて池袋で自立を目指し、一人暮らし始めるが、それはやはり淋しく心もとなない生活であった。一方で新宿は「爽涼」で、「居心地のよさ」を感じさせ、外国人のジョオとの出会いは今の生活とはかけ離れた仏印の日常に気持ち戻していく。ゆき子を自立した新しい生活へと向かわせる推進力となる街は池袋ではなく、新宿であることから作中の池袋と新宿の地は対照的に描かれている。またそれは作品内だけでなく、外側にも見ることができると同じマーケット街でも池袋は特に「汚い」、「もの悲しい」悪所として同時代の様々な媒体で書かれ、報道されており、そういった紙誌を読む同時代の人々の池袋像として印象付けていった。さらに「浮雲」が連載、刊行された昭和二十四年から二六年にかけて、池袋は東口マーケット街除去に関する事件や、依然として残る西口マーケット街の問題が世間を賑やかしていた。一方で新宿はすでにマーケット街は除去され「明るい」、「明朗」、「親しみ易い」街へと変貌していった。これらの対照的な出来事は同時代の読者が作中（終戦直後）の池袋と新宿の場面を読むとき、二つの地を自然と比較することにつながる。同時代の文学作品においてマーケット街を中心とした池袋は、丸の内や新宿と対比されるように描かれている。前章で見てきたカストリ雑誌や紙誌と同様に、それを読む同時代の読者にとって池袋とマーケット街の結びつきは強いものになり、悪所としての一面が際立って映っていったことだろう。実際に池袋が盛り場として発展していく過程においてマーケット街は欠かせなかった

が、それはあくまで池袋を生活圏ではなく、盛り場としてのみ利用する、いわば池袋を通り過ぎていく人々によって、好奇の目に晒されていたと言える。では瀧川駿と同じく豊島区にゆかりがあるところか、長年豊島区に居をかまえていた文人たちは、マーケット街を中心として急激に発展し、同時代のさまざまな媒体で悪所として伝えられていく池袋を、どう捉えていたのであるうか。

IV

これまで同時代の紙誌、文学作品においてマーケット街を中心とした戦後の池袋がどのように取り扱われ、同時代の人々の目にどう映ってきたかを考証してきたが、本章では戦前から池袋に居を構えていた文人たちが戦後の池袋をどのように捉えていたかを見ていく。先に述べたように、現在の豊島区内には大正末期から戦前にかけて貸し住居付きアトリエ群が存在し、その地域は小熊秀雄の命名によって「池袋モンパルナス」と呼ばれ多くの芸術家が生活の拠点としていた。このアトリエの一つ、すぐめヶ丘アトリエの住人には後に「セツ・モードセミナー」を開くことで著名な長澤節がいた。長澤は

今は絵描きとモデルが連れだつてゐる風景はないけれど、パンパンが軒並に立つて我々を見送る。それは駅から三ツ又交番までの間を二メートル置き位に続いている。(略)今の池袋は何もかも張れ上つたと言つたらいいのだからか。張れ上つた筆頭は人間の数、そしてマーケット、それらのゴミく

した間を探すように歩いてみても、前のように晴れやかな貧乏絵描きたちの顔を見出すことは出来ない²²⁾

と、絵描きの街からマーケット街へと変貌した池袋を嘆いている。若い芸術家たちが集まり、まるで一種のサロンと化していた「池袋モンパルナス」だが、中心人物であつた小熊秀雄や長谷川利行らが太平洋戦争中に相次いで逝去し、その他の芸術家たちにも応召や疎開が待ち受けていた。アトリエ群も空襲にあり、「池袋モンパルナス」も消滅へと向かう。それと入れ替わるように姿を現すのが、マーケット街であることが長塚の嘆きの背景に存在している。田端文士村や馬込文士村のように、豊島区にも「豊島文人会」なるものが存在した。そのメンバーの一員に、大下宇陀児がいた。宇陀児は現在までほとんど研究がされていない作家だが、かつて乱歩と双璧を成していた探偵作家である。彼は昭和九年に池袋駅東口近くの雑司ヶ谷に転居して来たのだが、それは期せずして乱歩が転居して来た同日であつた。また家が近いこともあり、編集者や探偵小説作家志望の人々のなかで、「池袋詣」なる言葉も流行していた²³⁾。宇陀児も戦後の池袋に否定的であつた。

バラック長屋のノミ屋街が、戦災直後の姿を、そのまま残している。雑然紛然たる形態が、特殊の魔力にならぬこともないが、世上に伝わる暴力カフエーなるものは、この形態からして発生したのだから。暴力カフエーのうわさで、池袋はどのくらい損をしているかわからない²⁴⁾

宇陀児は戦後のマーケット街の派生である「暴力カフェ」が、同時代の紙誌で報道されることで池袋に悪影響を及ぼしていることを嘆いている。宇陀児は町内会の役員や町会長も務めており、町内で昭和二七年に下水処理問題が発生したときも、先頭にたつて水道局に直談判をしている。そんな宇陀児からすれば、悪所として有名になっていく池袋を嘆くのは当然だろう。さて池袋に長く居を構えている文人といえは、冒頭に挙げた乱歩を忘れてはいけない。乱歩は終戦直後の昭和二一年に「池袋復興」という談話筆記を残している。

私の家の附近は皆焼けてしまつて今はその面影はうかゞふこともできないが割合庭のある家の多い住宅街で美術文芸方が人がどういふ縁故からか大勢住んでゐた、(略) 雑然とした場所の盛り場として隆盛の頂天にあつた池袋は、去年の四月十三日と五月廿五日でベシヤンコになつたが、私は今度の都市計画による池袋復興を楽しみにしてゐる、東口を商店街に、西口を官庁街に、そして地下鉄も通じる——何と素晴らしいではないか、もつとも何時の事やらアテにはならないが

(5)

この文章から乱歩が焼野原になつた池袋の復興に期待していることが分かるが、戦後池袋に広がつたマーケット街やその派生としての盛り場に対して乱歩は誰よりも不快感を示した。それもそのはずで「東口を商店街に、西口を官庁街」という都市計画はふたを開ければ、東西両口にマーケット街が広がっていたのだから。

乱歩は、「池袋に文化の香りを」と池袋駅東口に弁天祠を建立したり、巢鴨に由来のある遠山金四郎に関するイベント行つたりするなど、池袋で生活している者として積極的に行動していた。その後、東口が区画整理されたあとでも西口に象徴として残るマーケット街に対しても乱歩は抗議を繰り返した。昭和二八年一〇月六日付の『読売新聞』では当時の豊島区長と乱歩の対談が掲載されている。

「そうそう池袋駅西口の話が出たからこゝのガンのノミ屋街の整理の模様を聞きたいですネ」江戸川氏は西口に住んでいる。朝に夕にスエキつた果物のようなバラックのノミ屋にヒンシユクしている一人だ。(略)「いまでは半ば整理はあきらめた格好です」苦笑しながらこういう区長に江戸川氏は「そんなことじゃ困るナ。(略)西口ノミ屋街は犯罪が多い。犯罪は東京の中央で起きて犯人は周辺地区に逃込む。その逃込み場所がこのノミ屋街です」

乱歩は西口に依然として広がる「ノミ屋街」を池袋の「ガン」と断罪し、半ばあきらめている区長に対し抗議をしている。加えて乱歩が池袋に対して「マーケット街」や「闇市」という同時代に氾濫していた単語を使用していないことも注目すべき点であろう。つまり昭和九年より居を構え、町会副会長まで務めるほど池袋に親しみがある乱歩にとって、それらの単語は自分たちの街を蔑むものであつたに違いない。生前数多くの随筆を残している乱歩だが、「マーケット街」や「闇市」という単語は見当たらない

のは至極当然のことである。これは乱歩だけでなく先に挙げた宇陀児らにも言えることだ。同時代のさまざまな紙誌や文学作品で、マーケット街を中心とした戦後の池袋が取り上げられることによつて、同時代の人々の目に映る池袋はマーケット街が前面に押し出され、悪所として印象付けられていく。この過程によつて池袋を通り過ぎていく人々には池袋は好奇の的として映るが、池袋に居を構える人々にとっては、自らが生活する地の評判を貶めるという意味で迷惑以外の何物でもなかったのである。

V

戦後各地で発生したマーケット街の中でも、池袋のマーケット街は他の地域のそれに比べ抜きん出た広大さと撤去に時間が掛かったがゆえに、数多くの同時代の文学作品や紙誌に取り上げられたことを見てきた。それは同時代の人々に「池袋といえはマーケット街」というイメージを抱かせると共に、彼らの目に「池袋は悪所」と映すことに繋がっていった。その内容は池袋のマーケット街は「にぎにぎしさを再建日本の活況だなど」とひそかに北叟笑む人さえうようよしている世相²⁶とさえ伝えられていた。「池袋風俗」は戦後風俗の象徴としてもはやされ、好奇の目に晒され、話のタネとしてなけば面白く取り上げられている。しかしそれはあくまで池袋を通過する人々からの視点であった。一方で乱歩ら池袋に住む人々は誰よりも池袋の復興を願い、考えていたであろう。池袋が盛り場として発展していく過程においてマーケット街は欠かせなかつたことに間違いはないが、同時代の

人々の目に映る池袋はマーケット街が前面に押し出され、悪所として印象付けられていく。これは池袋に居を構え生活をする人々にとつて、全くもつていい迷惑であった。そういった状況に反抗すべく乱歩らは池袋はもろんのこと、豊島区全体に文化の香りを根付けせようと行動している。池袋に具体的にコミットし、行動することはマーケット街や悪所のイメージを受け入れない、いや受け入れる事が出来ない、池袋で生活をする者たちとしては当然のことだった。

戦後池袋のマーケット街というと、終戦からの復興の象徴とか、悪所としての一面のみがクローズアップされてきた。それは池袋を生活圏でなく、盛り場としてのみ利用する、池袋を通過していく人々から捉えた視点であった。その視点から語られることで、池袋は好奇の目に晒されていく。確かに池袋の復興にはマーケット街やその派生としての盛り場へと発展していく過程は欠かせない光としての側面があった。しかし池袋に居を構え、実際に生活をしている人々からの視点も忘れてはいけない。池袋に住む人々は自らの生活する地が悪所として有名になっていく、マーケット街の闇の側面を誰よりも憂いていたことだろう。それは同時代の資料からも読み取ることが出来る。マーケット街そのものや、そこに集まる人々、そこから盛り場へと派生していく過程に関する研究は多く見受けられる。本稿ではそういった池袋を通過していく人々の単一的な視点からだけでなく、戦前から池袋に住む人々からの視点を含めた、それぞれの立場の目に映った同時代の池袋を提示できたのではないかと考えている。

注

- (1) 近年では村上しほり「三宮東地区」「三宮国際マーケット」の形成と変容過程について…戦後神戸におけるヤミ市と市街地形成に関する史的研究」(『日本建築学会計画系論文集』平成二五年一月)や、石樽督和・初田香成「新興市場地区」にみる戦後東京のマーケットの建築的分析」(『日本建築学会計画系論文集』平成二六年一月)など社会学の観点からマーケット街に関する研究が積極的に進められている。
- (2) マイク・モラスキー編『闇市』(平成二七年八月、皓星社)
- (3) かつて豊島区にゆかりのある文人たちで結成された豊島文人会と豊島区的发展について論じた拙稿「豊島文人会」と池袋―『麦畑』から『アプレ盛り場』へ―(『立教大学日本文学』平成二六年一月、立教大学日文学会)も併せて参照いただきたい。
- (4) この歌は大正六年夏の作で、『さびしき樹木』(大正七年七月、南光書院)に取められた。ちなみに若山牧水は大正六年五月から北豊島郡巢鴨町に居を構えていた。
- (5) 山手樹一郎「あのことこのこと」五(『山手樹一郎全集』二四卷月報、昭和三六年一月、講談社)
- (6) 江戸川乱歩「池袋二十四年」(『立教』昭和二年一〇月、立教大学)
- (7) 小川武「池袋駅」(『流線型アベック』昭和一〇年五月、丸之内出版社)
- (8) (6)に同じ。
- (9) 竹田鐵三『鐵神父特集 池袋慕情』(昭和五三年一月、ひぐらし社)
- (10) 東不二雄「マーケットの実態」(『防災』昭和二三年四月、東京連合防火協会編集部)
- (11) 梅崎春生「今や紳士なった街…」(『ほろにが通信』昭和二八年九月、朝日麦酒株式会社)
- (12) 他にも奥野信太郎『随筆東京』(昭和二六年一〇月、東和社)では「バス通り両側の裏は全部が全部といつてよくくらる飲屋がひしめきあつてゐる。山なす税金に追はれつつ、よくもかうまで同じ稼業が共喰ひにならずにやつてゆけるものだと感服させられもするが、その一つ一つが小料理店のスタンドだの中華料理だの看板を出して、とにかくぎつしり軒をならべてゐるのだ」と表現し、新田潤は「街の表情 池袋」(『新東京案内』昭和三年三月、毎日新聞社)において「終戦直後の四、五年というものは、池袋くらい汚い盛り場なかった。駅を挟んで東口、西口のマーケットは、異臭を放ち、じくじくと湿つていて、文字通りの迷路を形づくっていた。そんな中をぶらつくのは何かうす気味も悪く、また実際に各種のやくざ、チンピラなども横行し、犯罪の巢とか、ポソとハジキの街」と言われたものである」と振り返っている。
- (13) 『探偵新聞』の創刊は江戸川乱歩も喜んでおり、「発刊を祝す」(『探偵新聞』昭和二年七月二〇日)では「日本人は元々、どちらかという論理的思考力が足りず、一つのことを徹底して掘り下げるといふ点が欠けているといはれるが、この意味からも小説に限らず推理物、探偵物の普及は大切だと思つていた、ところが今度、世にも珍しい、試みとして探偵新聞が発刊されたときいて御同慶にたえない。而も記事の取材、事件の探索にはその方面のエキスパートな記者達が当られるというから、ニュース性からも、事件性からも或は事件の掘り下げ方からも、面白いものが読める」と期待している」と文章を寄せている。
- (14) 『戦う建築監視官』(二)―池袋東口マーケット除去事件―(『建設月報』昭和二三年六月、建設広報協議会)

- (15) 「半か月に八三名検拳」〔読売新聞〕昭和十九年六月二日付
- (16) 「無法地帯・池袋西口マーケット」〔読売新聞〕昭和三〇年七月一日付
- (17) 「黒い地帯 池袋西口マーケット街」〔読売新聞〕昭和三五年六月一八日付
- (18) 昭和三七年一月二七日付「読売新聞」の「池袋駅西口」戦後処理「やっと終わる」と題した記事に「国電池袋駅西口の区画整理で最後まで残っていた森田組マーケットの立ちのきも、自主取りこわし」の声のかかった二十日までにすっかり姿を消すことになりそう」と報道されている。
- (19) 作中では、「ゆき子は目的のない気持ちで、新宿へ出てみた。(略)伊勢丹のところまで歩いてくると、背の高い外国人によびとめられた。(略)運命が、少しずつ何処かへ向けて進行していつているような進行していつているような気がした。お互いの衝動が、このゆきずりの二人の心のなかに一種の生気をもたらして来る」、「ゆき子は外国人と腕を組んで新宿駅に行き、珍しい外人専用車の省線の電車に乗せて貰った。ゆき子は晴れがましい気持ちで、小さくなって、自分の道づれに寄り添っていた。サイゴン街を想い出して、その昔に戻ったような気がしないでもない」と描かれている。
- (20) 川本氏は「浮雲」をおおう「暗さ」〔「大航海」平成一二年八月、新書館〕において、「作品のなかに時期が明示されていないが、のちにゆき子が新宿でアメリカ映画、グリア・ガースン主演の『キュリー夫人』を見ることから、この映画が日本公開された昭和二十一年ごろとわかる。ゆき子は南方からの引揚げらしく、冬支度をしていない。昭和二十一年の一月か二月ごろであろう。『キュリー夫人』はこの年の二月に公開されている」と、作中の時代設定を昭和二一年初頭からと分析している。

(21) 新宿のマーケット街撤去については昭和二六年七月一日付「読売新聞」にも「明るくなった新宿」と題した記事で、「新宿腐敗の動脈をなしていた和田、野原、安田の三大マーケットはいち早く手入れを行い零細な露天商を食いものにしていった顔役をせいに清掃して歓楽街の様相をまるで明朗なものにした」と報道されている。

(22) 長澤節「東京の女 池袋の女」〔放送〕昭和二五年六月、日本放送出版協会

(23) 角田喜久雄「池袋詣」〔月刊いけぶくろ〕昭和四二年四月、池袋社)はその初出が不明であったが、拙稿「豊島文人会」と池袋「麦畑」から「アブレ盛り場」へ」でそれが判明した。

(24) 「池袋繁盛記 西も東も新開地」〔読売新聞〕昭和三〇年一月二五日付

(25) 江戸川乱歩「池袋復興」〔山手毎日新聞〕昭和二十一年一月一日付)。この文章は現在まで刊行されている乱歩の単行本には収録はされていないが、自製のスクラップブック『貼雑年譜』の第三巻に貼られていた。

(26) 吉田謙吉「池袋風俗考現学」『旬刊ニュース』(昭和二三年四月、東西出版社)

※引用にあたっては旧字を新字に改めた。傍線は注記のない限り論者が附したものである。「浮雲」の引用は「林美美子全集」(昭和五二年四月、文泉堂出版)に拠る。なお本稿は平成二七年度日本学術振興会特別研究員採用課題の成果の一部であり、執筆するにあたり、独立行政法人日本学術振興会より科学研究費補助金(特別研究員奨励費15J01460)の交付を受けた。

(かげやまりよう) 大学院後期課程在学学生/日本学術振興会特別研究員DC)